

特集

「協働」と「連携」によるまちづくり⑭

山形県鶴岡市の地域人材によるまちづくり事業

# 市内6つの地域グループが切磋琢磨する

## 「鶴岡まちづくり塾」



朝日グループ『六十里街道トレイルラン教室』



全体会での「鶴岡市総合計画実施計画」についての意見交換風景



羽黒グループ『輝けやまがた若者大賞』授賞式にて

山形県鶴岡市では、平成21年から、まちづくりに関する検討、実践に取り組む「鶴岡まちづくり塾」が開講されており、市内6つに分かれたグループが、それぞれの地域資源を活用した様々な実践活動で、成果を上げている。



鶴岡グループ『大人の修学旅行雛見編』



温海グループ『Facebookページ「あっぺでいあ」』の作成



藤島グループ『オール藤島産の給食』



鶴岡グループ『船に乗ってお花見しよう』

### 現代に蘇る「自主性」に基づく藩校教育

山形県鶴岡市は、東北で最大の面積と県内で2番目の人口を持つ都市である。古くは庄内藩の城下町として、明治維新後は、庄内地域の産業・経済・社会の発展を牽引してきた。

その鶴岡市役所の南側に、風格ある佇まいの『致道館』という建物がある。国指定史跡として、東北方に唯一現存する旧庄内藩の藩校だ。表御門を入れて、聖廟、講堂、御入間、藩主のお成りの間、などが建ち並ぶ構内を歩くと、子弟のざわめきや、素読する声が聞こえてくるような感覚に包まれる。

文化2年（1805）に、九代藩主酒井忠徳が開校し、当時主流であった「朱子学」を離れ、荻生徂徠の「徂徠学」を基に、藩士の子弟を教育した。その学風は、天性の能力と、形式にとらわれずに

自主性を重んじる「実学・活学」といわれ、後に「庄内学」とまで呼ばれるようになったという。

時代は下って平成の今、鶴岡市では、「市民と行政の協働」、「若者の発想とエネルギー」、「将来を担う人材の育成と、若者の交流・連携」を趣旨として、まちづくりに関する検討・実践に取り組む「鶴岡まちづくり塾」が開講されている。この塾がユニークなのは、何らかのキャリアラムに基づき、まちづくりを学ぶというものではないことだ。

6つの地域グループに若者たちが集まって、自主的に地域資源を調査し、まちづくりを行う『自由な検討・実践の場』に近い。その意味で、かつて「自主性」を重んじた「実学」と呼ばれた「致道館教育」が現代に蘇ったような感がある。



#### つるおか 鶴岡市情報

【人口】132,015人(平成27年8月現在)

【面積】1,311.53km<sup>2</sup>

【発電所データ】

東北電力(株)八久和・倉沢・寿岡・蘇岡・梵字川・名川・大針・新落合・落合・月山・横ノ代・温海川水力発電所

【本特集問合せ先】

鶴岡市 企画部 政策企画課 ☎0235-25-2111(代)

# 「大合併」が背景となつて 鶴岡総合研究所に事業を委嘱

「鶴岡まちづくり塾」が開講された背景は、「平成の大合併」にさかのぼる。平成17年、旧鶴岡市と、旧藤島町、旧羽黒町、旧櫛引町、旧朝日村、旧温海町の1市4町1村が合併を行い、東北最大の面積をもつ都市となった。

合併後の平成21年、鶴岡市総合計画が策定され、具体的な実施計画づくりに入る。それを契機に発足したのが「鶴岡まちづくり塾」であった。

そして、この事業は、「鶴岡総

合研究所」に委嘱されることとなる。この研究所は、「鶴岡の将来像を模索するとともに、地域づくりのあり方について、調査研究する」という目的で、平成5年に設立された。合併前から、鶴岡に係のある学者や専門家、市民などで構成され、初代所長は山形大学農学部名誉教授の故北村昌美氏。現在の所長は同じく山形大学農学部の平智教授が就任している。

鶴岡総合研究所が、平成9年度から運営している「鶴岡致道大学」



『致道館』〔上〕左側が講堂、右側が御入間〔左下〕正門〔右下〕講堂内部

「鶴岡まちづくり塾」の組織は、居住地や勤務地に応じ、かつての行政区割りである鶴岡、藤島、羽黒、櫛引、朝日、温海の6地域グループに分けられている。塾生は鶴岡市の公募に応募した、各グループ10〜20名。

平成27年度の第4期生は、男性52名、女性26名の計78名だ。応募資格は鶴岡に在住・在勤する20〜40歳の市民で、月1回程度の会議への出席と、仕事や学業等と並行して、各グループで調査・実践活動を行う。リーダー1名、サブ

## 6つの地域グループで活動し メンバーの任期は2年

リーダー2名のもと、若手市職員のほかに、地域おこし協力隊もメンバーに入っている。

メンバーの任期は2年で、OB・OGを含めると、今までに延べ160名が参加している。

公募に応募したメンバーだが、活動報酬の支給はない。各グループが行う具体的な取り組みについて、今年度は地方創生関連予算により補助金という形で市が支援しているが、昨年度までは「まちづくり塾」が行う取り組みについての予算化はされていなかった。

事務局を市の政策企画課と地域庁舎総務企画課に置き、前述の山形大学農学部の平智教授をチーフに、同じく山形大学農学部の江頭宏昌教授、小山浩正教授の3名がアドバイザーになっている。

その活動は多岐にわたる。全体活動では、各グループの活動報告の他、鶴岡市総合計画実施計画への提言、研修会や交流会を通じて地域や塾生間のネットワークの構築を行っている。

各グループの取り組み活動の内容は右表を参照していただくところから、地域資源の発掘から、イベント開催、産品や商品の開発、情報サイトの構築など、地域の実情や特性に合わせた幅広いものだ。



チーフアドバイザーの山形大学農学部教授 平智さん

### 鶴岡まちづくり塾におけるこれまでの主な取り組み内容

<b>全体活動</b>
鶴岡市の総合計画実施計画への提言。研修会や交流会などを通じ、地域住民やメンバー間のネットワークを構築。
<b>鶴岡グループ</b>
まち歩きイベント「大人の修学旅行」を開催。鶴岡公園のお堀に木舟を浮かべ、お客を乗せての花見イベントを開催。地元の映画館などで「学校給食発祥の地・鶴岡」をテーマにした映像上映会&トークショーを開催。
<b>羽黒グループ</b>
住民向け観光ガイドブック『おもてなし観光ガイドブック1「出羽三山の開祖はちこの皇子物語り」』、『おもてなし観光ガイドブック2「刀を鎌にかえて松ヶ岡かいこん物語り」』の制作。平成27年度「輝けやまがた若者大賞」受賞。
<b>藤島グループ</b>
藤島地域で穫れたお米で作ったおにぎりの食べ比べ「あんべみセット」の販売。メンバーが考案した「オール藤島産給食」を地元小学校で提供。藤島の名所を紹介したパンフレット「ふじしま自然体験ナビ」を制作。
<b>櫛引グループ</b>
婚活イベントの実施。農産物や手作り雑貨などの出店販売イベントや、森の保全・活用を目的とした「こしゃってマルシェ」の開催。
<b>朝日グループ</b>
六十里越街道をPRしたトレイルラン教室を開催。地域の様々な「祭り」に参加し、新たな魅力創出や内容のブラッシュアップを実施。朝日地域の良さを地域住民にインタビューした映像を制作。
<b>温海グループ</b>
温海地域にちなんだオリジナルデザイン「ATSUMI-Tシャツ」を作成。温海の情報詰まったサイト「あつべであ」を制作。

# 若者が地域に集い、生産者と消費者が交流する「場」を作る

その中のグループ活動の一端を紹介しよう。

榊引グループは、昨年夏より季節ごと計5回にわたり、榊引庁舎に隣接した広場で『こしやってマルシェ』を開催してきた。「こしやって」というのは「こさえる(作る)」という庄内地方の方言からとったものだ。



榊引グループ『こしやってマルシェ』のチラシ

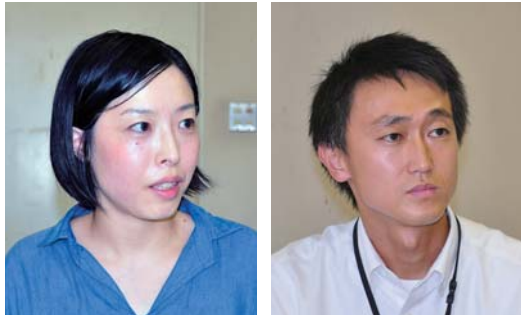
ここでは、地元の生産者や事業者を中心とした30ほどの団体が、

農作物や木工製品などを販売する。今年7月の開催では、入場者1,100人で総額150万円の売り上げをみた。

グループの宮城妙さんは2013年に入塾した3期生。東京で家具デザイナーをしていたが、震災後、榊引地域へUターンして実家のさくらんぼ農園を継いだ。子育てにも奮闘する主婦でもある。故郷に帰ってきて生活するうちに、若者が地域で集える「場」や、生産者として消費者と交流する「場」が欲しい、との想いがつのつていく。

平成25年、「鶴岡まちづくり塾」に応募し、地域資源を学ぶうちに『こしやってマルシェ』を提案した。

## 榊引グループ事務局



榊引グループ 宮城 妙さん



榊引庁舎総務企画課専門員 佐藤 文博さん

である榊引庁舎総務企画課専門員佐藤文博さんが、宮城さんは、グループのエンジン」というように、率先して、グルー

プ内で検討を繰り返しながら、開催にこぎつけた。

「塾の活動を通し、私たちの地域には宝があることを実感しました。それを子供たちにつないでいきたい。子供たちが大きくなつて、

# 先人の労苦を今に伝える 歴史ガイドブックを作成

羽黒グループは、子ども向けの歴史ガイドブックを制作した。第1期から、羽黒地域の伝統・文化を学び合う中、これを地域の子どもたちに伝えていけるような良いアイデアを「KJ法」で探つていった。

ちなみに、ワークシヨップなどで多用されている「KJ法」の開発者である東工大名誉教授の故川喜田二郎氏は、鶴岡総合研究所の研究顧問のひとりである。

たどり着いたのが、子ども向けに、地域の歴史を紹介する冊子の制作であった。その題材は「はちこの皇子」。蘇我馬子に暗殺された崇峻天皇の皇子で、都を逃れて、山岳信仰の聖地といわれる出羽三山(羽黒山・月山・湯殿山)を開山した人だ。

だが、塾生のほとんどは、ガイドブックの制作については「素人」同然。取材、写真撮影、原稿作成などは一からの出発で、試行錯誤

開催する側になつてくれたら素敵だと思えます」と宮城さんは語る。

市内の若い人たちとのつながりがもつと欲しいので、この塾の活動をさらに、進めていきたいと、顔を輝かせた。

の連続だった。メンバーの中いたライター経験者やデザイナー経験者の指導もあつて、苦勞の末、一昨年「おもてなし観光ガイドブック1『出羽三山の開祖はちこの皇子物語り』」を発行することができた。

また昨年、第2弾として「おもてなし観光ガイドブック2『刀を鍛にかえて松ケ岡かいこん物語り』」も発行した。羽黒地域にある「松ケ岡」は、戊辰戦争で敗北した庄内藩士が賊軍の汚名をそそぐために開墾したところ。この「松ケ岡」に造られた蚕室は、絹産業など、近代鶴岡の発展の礎ともなつたところだ。不毛の原野を切り開いた旧庄内藩士の苦勞を、

次世代に伝えたいという、羽黒グループの想いだった。

古野伸典さんは農業の研究開発に携わる県職員。第1期から参加しており、このグループのリーダーでもある。



Atsumi - T - Shirt - Project

温海グループ 『ATSUMI T-SHIRT PROJECT』



藤島グループ 『家族であべ! 藤島探検ナビ』



羽黒グループ 『おもてなし観光ガイドブック』

「地域の子供たちに何を伝えていくかということが重要でした。第3弾のアイデアも出ています。苦勞しましたが、その経験が積み上がつてきているので、これから楽しみです」と古野さんは言う。この羽黒グループは、地域の魅力を伝える活動が評価され、昨年度の『輝けやまがた若者大賞』を受賞した。

羽黒グループ事

羽黒グループ『おもてなし観光ガイドブック』制作で何度も重ねた編集会議



務局である羽黒庁舎総務企画課主事の伊藤寛実さんは、「本の制作という大変な作業を成功させて、グループの皆さんのモチベーションはとても高いです」と言う。

今後の「鶴岡まちづくり塾」について、宮城さんと古野さんが口を揃えるのは「他のグループとのさらなる連携強化」だ。例えば「こしゃってマルシェ」を他地域と連携しながら開催するなど、それぞれが触発し合いながら、地域への想いを形にしていきたいと語った。

## 時を超えてメンバーに流れる 庄内の「気風」

このように、各地域で着々と成果を積み上げてきているこの事業だが、その要因のひとつには、合併前の各地域に即したグループに分けたことが挙げられる。

このことによって、メンバー自らが住む地域の現状と課題を、細かく捉えることが可能となった。それをもとに、特性を活かす取り組みを模索した。また、グ



政策企画課主事  
木村 光希 さん

もうひとつの要因は、塾生の「自主性」を重んじるということだ。事務局である行政職員は「橋渡し役」に徹している。「成果」を急ぐあまり、行政が活動内容に「口を出す」



羽黒グループ  
古野 伸典 さん



羽黒庁舎総務企画課主事  
伊藤 寛実 さん

ループ分けによってお互いに切磋琢磨する意識も生まれた。

「今後は、これまではどちらかといえば競い合ってきた各グループの取り組みの中から、共通項を見出して、全体で取り組めるようなものを、抽出していけたらと思っています」と、鶴岡総合研究所長でありチーフアドバイザーでもある平智教授は期待する。



全体会での現地学習会

ことはしない。あくまでも、塾生たちが「自らが考え、自らが行う」ことが基本なのだ。

鶴岡まちづくり塾の統括担当者である企画部政策企画課主事の木村光希さんは、「塾生の皆さんを信じて、これからも、じっくりと取り組んでいきたい」と言う。

4期、足掛け7年にわたってこの事業が続き、成果を出してきたのには、鶴岡という土地の持つ「気風」が関係するように思える。

明治時代の政治家であり漢学者でもあった副島種臣は、庄内人の気風を指して「沈潜の風」と評したといわれる。その意味は、常に静かに地道に力を養い、いざという時にはそれを大いに発揮するという意味で、『花よりも根を養う』が庄内に住む人々の生き方だというのだ。

また、前述したように「致道館教育」では、何よりも自主性が重

んじられた。形式に捉われず、自由に教材を選び、関連な意見を交換したという。

市職員をはじめ、メンバーの皆さんの話を聞いていると、確かに、こうした「気風」は200年以上の時を超えて、「鶴岡まちづくり塾」という「場」の中に息づいているように思える。

今後について、前述の木村主事は次のように語った。

「メンバー間の横のつながりをさらに強化して、若者のネットワークを強固なものにすることと、民間企業や学生などと連携して活動の幅を広げるなど、元気な鶴岡を市内外に発信することを期待し

ます」

現在、榎本政規鶴岡市長が掲げている「鶴岡ルネサンス（再生）宣言」の考え方をもとに、市は「創造文化都市」、「観光文化都市」、「学術文化都市」、「安心文化都市」、「森林文化都市」を成長戦略の柱として、まちづくりを進めている。

その推進役のひとつとして「鶴岡まちづくり塾」の今後の活動に注目したい。幕末の「松下村塾」や「適塾」でも、塾生は「自由闊達」な議論を行い、自主的に行動したという。

内発性に富む、「まちづくりの志士」が続々と躍り出てくることを願ってやまない。

## 昨年12月「ユネスコ創造都市ネットワーク」への加盟が認定される

鶴岡市は豊かな自然環境に恵まれて、農林水産業や酒造業などの伝統産業が発展してきたところ。1年を通して、旬の味をふんだんに生かした多様な食文化が形成されてきており、特に「だだちゃ豆」や「温海カブ」などの在来作物が



「ユネスコ創造都市ネットワーク」への加盟が認定された瞬間

50種類以上も継承されてきている。出羽三山の修験道や黒川能などの精神文化と密接に関わる食が継承されており、各家庭では多様な郷土食や行事食が大切に受け継がれている。さらには学校給食発祥の地であることから、地産地消給食などの食育事業も積極的に推進している。

市内には山形大学農学部や慶應義塾大学先端生命科学研究所などが立地しており、在来作物や食材に関する保存・研究普及活動も盛んなところでもある。鶴岡らしい食文化の創造を目指した様々なプロジェクトも推進しており、今回の『ユネスコ食文化創造都市』認定は、市内の食文化産業のさらなる振興に拍車がかかっている。